

シリーズ

阿久比を歩く ④



色鮮やかに咲く 菜の花

日曜日、友人と二人で阿久比駅発午前九時十一分の名古屋方面に向かう名鉄電車に乗り、三つ目の駅巽ヶ丘で降りる。巽ヶ丘駅西前の道路付近が、阿久比地内での県道55線最北端。今回はここからスタートして県道を南に下るぶらり旅に出掛けた。日差しは春。良い天気だが、風は強く、朝セットした髪が乱れる。開店前のスーパー入口に行列が出来ている。日曜特売を目当てに並んでいる買い物客だろう（たまに開店前に

阿久比の道を行く（県道55号線①）

あぐいぶらり旅

並ぶことがあり、そこに並んでいる人たちの目つきと同じだった（ので間違いない）。風に乗って食欲をそそる揚げ物のおいが流れてくる。県道の車が通り過ぎるのを横目に歩を進める。道端の所どころにタンポポやツクシが目立つ。阿久比川と草木川の合流付近で菜の花が一面に広がる場所を見つけた。黄色の鮮やかさがとてもまぶしい。その風景を写真で残そうとカメラで撮影を始める。友人が「僕がモデルになりましたよ」と笑みを浮かべながら話し掛けてきたのでカメラをしまった。途中で休憩を取ることにした。まんじゅう屋さんに立ち寄り、春らしく「桜餅」を二つ購入。県道から少し道を外れ、坂部駅前のベンチに座り、缶コーヒーを飲みながら桜餅を食べる。先ほどから女性の笑い声が気になる。休憩しているところから少し離れたベンチに、若い女性が二人楽しそうに話し込んでいる。シャイな

私たちが思い切って話し掛けてみる。

「天氣が良いので、外でおしゃべりをしています」と笑顔の素敵な二人は阿久比在住の十九歳の学生『あぐいぶらり旅』を読んだことがあると言ってくれた。北の方からずっと歩いてきたことを話すと「本当ですか。すごいですね」と感動してくる。

「僕たち阿久比を歩いて回っているんだけど、この町の好きなのところはありますか」と尋ねる。田んぼが多くて、のどかなところですよ」と答えが返ってきた。

女性たちと別れ、少し歩くと友人が「今どきの若い子にしては好感の持てる、素朴な二人だったなあ」とうなずきながらひとりしゃべっている。「顔を赤くして、女性と話す君も素朴で純情だよ」と私が言うと、友人は照れくさそうに顔を赤くして、頭をかいていた。

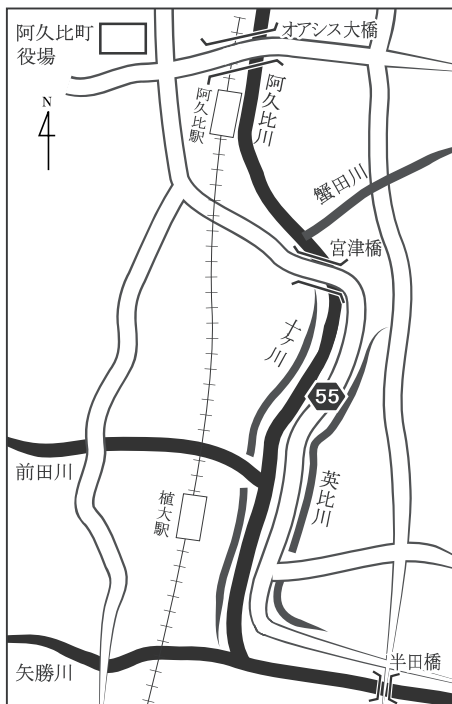
役場まで歩いて今回の旅を終えた。次回はさらに南下を続けようと思う。



道端のツクシ

シリーズ

阿久比を歩く ⑤



阿久比川を泳ぐカモ

土曜日、天候は曇り。役場に集合して前回に続き県道55号線のぶらり旅に出掛ける。
町一番の繁華街で、高層マンションが立ち並ぶ（少し大げさ）阿久比駅前を歩く。「十年一昔」と言うが、ここ数年で駅前もかなり様変わりをして、にぎやかになっている。普段、車で通っている道も、歩いてみるといつもと雰囲気の違い、住んでいる人や働いている人の気配を感じ取ることができる。

阿久比の道を行く（県道55号線②）

あぐいぶらり旅

名鉄電車の踏み切りを渡った付近で、車に乗った職場の男性とすれ違う。助手席には見たことのない女性が座り、二人で楽しそうに話している。（後日聞いた話では、女性は妹らしい。）

少し歩くと、見慣れた阿久比の風景。南北に田園が広がってくる。阿久比川の堤防を駆け上り、川をのぞく。残念なことに、ゴミが捨てられているのが目立つ。川の素晴らしい景観がだいなしだ。気分が落ち込む。気を取り直して、歩き続ける。後ろを振り返ると、町の東西を結ぶ橋「オアシス大橋」の全景が見える。緩やかな弧を描く「アーチ」は、まさに芸術作品だ。

さすが県道だけに、車の交通量が多い。大きなトラックが通るたびに風圧で体が飛ばされそうになる。阿久比川と平行して道は続く。足を止めて川に再び目を向ける。七羽のカモたちが気持ちよさそうに列を作り、川の流れと逆方向に泳ぐ。一匹のカメは石に上がり、あくびをし

ているかのように首を長く伸ばす。近づこうとすると、人影に気付いたのか、カモは飛び立ち違う場所に移動、カメは水の中にもぐってしまう。くつろいでいた動物たちの邪魔をしてしまった。自然を壊してしまうのはいつも人間の影があるのかと思う反省。

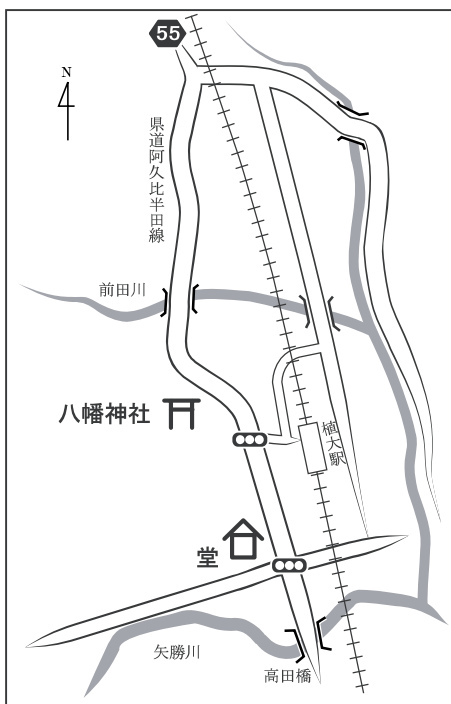
県道55号線を行く旅は半田橋まで歩いて終了とした。ゴールはしたがスタート地点の役場まで帰るには、また歩いて帰るしかない。友人が車で、誰か知った人通りませんか」と弱音をほく、「最近肥えすぎて腹回りが気になるから、がんばって歩くぞ」と私がげきを飛ばす。「じゃあ、ちまたで流行中の『ウオーキングダイエツト』といきますか」。二人で両手を上げ、腰をくねくね動かし、鼻歌を歌いながら阿久比川右岸堤を歩いた。



芸術的な「アーチ」を描くオアシス大橋

シリーズ

阿久比を歩く⑤1



堂にまつられる石像

今回は県道阿久比半田線のぶらり旅に出掛けた。知人に車で高田橋まで送ってもらい、そこから北に向かって歩くことにした。左手遠方には、緑の森がこんもりと盛り上がった権現山が見える。どこからともなくサクラの花びらが風に舞い、高田橋下の矢勝川に落ちる。淡いピンクの花びらが水面を覆い、緩やかな川の流れに乗り、下流へと進む。満開に咲き誇るサクラも良い

阿久比の道を行く(県道阿久比半田線)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

が、散ったサクラも、いとをかしである。

少し歩くと、コンビニエンスストアの駐車場の隅に「堂」を発見。約三メートルの高さで、一メートルほどの奥行きと間口の堂の中には、地蔵らしき石造物が安置されている。石像の左右に何か文字が刻まれている。

「何かに、おいますね」「君もそう思うか」少し前のテレビドラマの刑事のような会話を友人と二人でしていると、通り掛かりの男性に「何か探しているの」と声を掛けられる。事情を話すと、「ここの家の人なら知っているとすうよ。私が声を掛けてあげるよ」と言ってくれ、堂の西側に建つ家に住む男性を紹介してくれる。

石像は今の場所よりも少し北側に野ざらしで立ち、刻まれた文字は、右よこすか左おの」と判明。もともと道標だったらしい。堂は明治時代に男性の先祖が建て、この界隈を襲った幾多の水害でも流されなかつ

た。男性は道が広がるときに、石像の所有者を調べたが分からず、先祖が見守ってきた堂と石像を自らの手で現在の場所に移動させた。私たちは意外な事実を知る、「おばあさんが毎日、扉をあけてお花と水を供えています。家族が幸せなのは、そのせいかもしれません」と男性が目を細めた。

北上を続ける。大古根地区の八幡神社下の道はサクラの花びらで「じゅーたん」が敷かれたかのようになっている。今年は花見に行けなかった私たちだったが、今日のぶらり旅は違った角度でサクラの観賞を楽しめたような気がする。

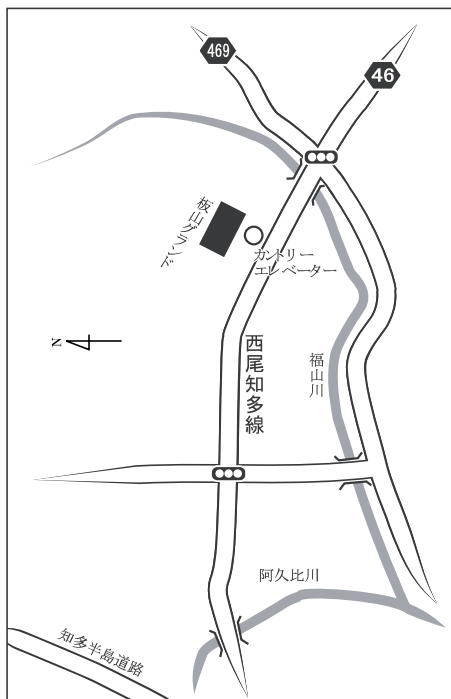
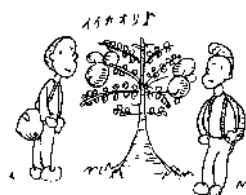
隣から「♪さくら舞い散る道の上で♪」と独唱を始める友人の下手な歌が私の耳に残った。



高田橋から見た権現山

シリーズ

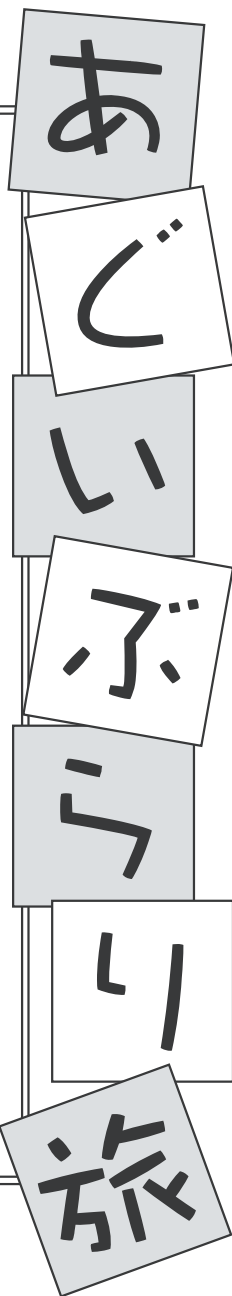
阿久比を歩く ⑤2



タンポポの綿毛

西尾知多線（県道46号線）の阿久比地内最東端からスタートし、西へ向かいぶらり旅を始めた。道端に咲くタンポポの花にはミツバチが止まり、その横で綿毛は風が吹くのを待っている。つい最近までピンク色のレンゲ草が咲いていた田んぼにも水が張られ、田植えの準備が進む。県道から道を少し脇にそれ、農道を歩く。梅の木が目につく。枝には実が生り始めている。鼻を近づける。

阿久比の道を行く（西尾知多線①）



「いいにおいがするねえ」。すっかり花粉症が治まった私にはほんのりと甘酸っぱい香りがした。友人は「今日は鼻が詰まっっていて、何もにおいせん」。（季節感のないつまらない男である。）

「ケーン。ケーン」。キジの鳴き声がよく聞こえる。田んぼに目を向ける。あぜ道で首を長く伸ばしキヨロキヨロとするキジを発見。「あそこにもいますよ」。「あれもそうじゃないか」。確認できただけでも三羽いた。双眼鏡がなくてもバードウォッチングを楽しめた。

県道に戻る。こいのぼりが民家の軒先で風に泳ぐ。『ゴールデンウィークの予定は』と友人に尋ねられる。「どこに行っても混むから、近くの公園でも行つて、子どもと自転車の練習でもしようかなあ。」「ところで君は」「まあ、それなりに忙しいですわ」と不敵な笑み浮かべて意味不明なことを話していた。

JAあいち知多のシンボルタワー「カントリーエレベーター」を通り



梅の実

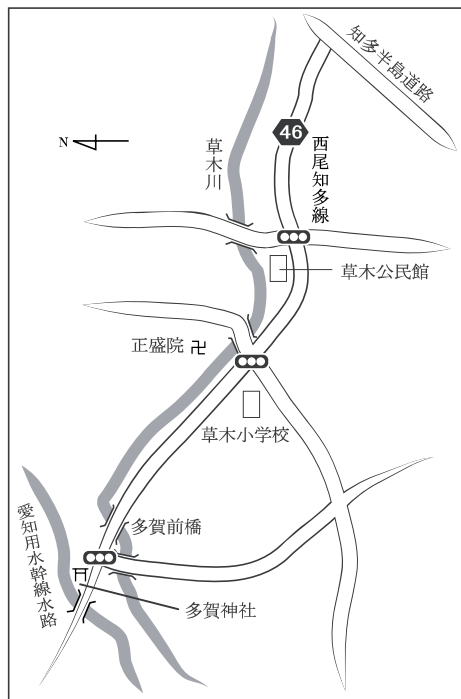
過ぎたところから車の量が増える。知多半島道路が近いせいか特にトラックが多く通り過ぎる。見ず知らずの車にクラクションを鳴らされる。誰だか分からない。激励だと勝手に想像し歩を進める。

少し高台に竹やぶが見える。タケノコがメートルほど伸びている。「あれだけ伸びているとタケノコは、かたくて食べられないんだよ」と友人に教えると「へえ、そうなんですわ。タケノコはいつから大人になるんですかね」「それは難しい質問だな。ところで今日は「梅」と「竹」ときたから次は何がくれば最高だと思う」「疲れたから甘いものがいいですね」「ええ……」「松」を探しに「こう」。

阿久比川を眺めて今回のぶらり旅を終えた。次号につづく。

シリーズ

阿久比を歩く ⑤③



阿久比町と知多市の境界付近

前回に続き、西尾知多線（県道46号線）を西に向かい歩いた。新緑がまぶしく、風はさわやかだ。「松がありますよ」（前回のぶらり旅で梅と竹に遭遇している）友人が指差す。民家の庭先で立派にせんでいされた松を発見。松竹梅に出会うことが出来て、縁起のいい道ですね。「同感だ……」。その後、お互い話が続かず、無言で歩き続ける。ゴルフ練習場の前を通り掛かる。少しおなかの回りが気になる中年の

阿久比の道を行く（西尾知多線②）

あぐいぶらり旅

おじさんたちが「打ちっ放し」に精を出す。私もメタボリック症候群に近いものがある。日ごろ「何か運動をしなければ」と思うが、なかなかできない。一念発起。腰をクネクネ動かしながら「ウォーキングダイエット」を五十メートルほど実行する。

田植えの終わった水田をのぞく。あぜ道の草むらに潜んでいたカエルたちがいつせいに田の中に飛び込む。「ポチャーン。ポチャーン。ポチャーン」。水の音が響く。友人が「水田や蛙飛び込む水の音」ですかね。芭蕉になった気分です」と言って、手のひらに字を書くまね事をしている。「うまい」と言って手をたいてほめる。「最近、夜カエルの鳴き声が気になりましたか。冬の間にどこで過ごしていたんですかね」「ええ。それ本気で聞いているの」「冗談ですよ。池で平泳ぎの練習をするらしいですね」。

多賀前橋で草木川を眺めていると、地震かと思うような橋の大きな揺れ。

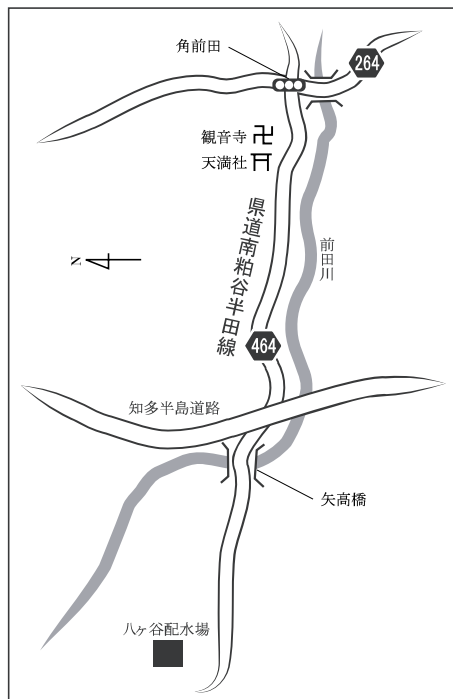


愛知用水路

私たちの横を観光バスが通り過ぎる。バスの高い座席から物珍しそうに私たちを見る乗客。二人で手を振って見送った。春の日差しがきついせいか、かなり汗ばんできた。多賀神社の前を通る。ゴール地点となる阿久比町と知多市の境が近い。坂を上りきると「愛知用水幹線水路」と書かれた看板が目についた。その下を愛知用水が通る。知多半島の農業や工業のために使われる水がこの水路一本に集約されている。この用水を造った先人の苦勞を、小学校の社会の時間に「のびゆく大愛知」という教科書で学んだ記憶がよみがえる。豊富な水量を見て、先人の苦勞を思うと汗が引いた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑤4



水田で水浴びをするシラサギ？

今回は県道南粕谷半田線（464号線）のぶらり旅に出掛けた。常滑市と阿久比町の境から東へ向かう。スタートした場所近くの小高い場所に、阿久比町南部地域の生活水を配水する「ハケ谷配水場」がある。少し道を外れて配水場に足を運ぶ。フェンスに囲まれた中に配水場がある。生活を支えるための水の重要な地点。この場所から東の方角には三河の山を眺めることができる。少しかすんでいるのが残念。知多半島道路も見える。渋滞もなく車はスムーズに流れている。

阿久比の道を行く（県道南粕谷半田線）

あぐいぶらり旅

矢高橋の上から前田川を見た。ヘビが川を泳いでいる。冷めた目で、舌を出しながらこちらを見ている。

464号線に戻る途中は田や畑が広がる。水田でシラサギ？が水浴びをしている。実に気持ちよさそう。「さっきのはこれですよ」友人が畑を指差す。畑には泥が付いたタマネギが何列にも並ぶ。にょい、の正体は今が旬の新タマネギ。タマネギを食べると血液がサラサラになるらしいですよ。テレビの実験でやってました。「テレビの実験？それ怪しい話だなあ。だけどこの季節のタマネギは甘くておいしいから健康のために食べるよ」。なぜか最近、健康の話ばかりになってしまふ。

路も見える。渋滞もなく車はスムーズに流れている。目を開けているのがまぶしいほどの初夏の日差し。友人と二人で手を広げて大きく深呼吸。「にょい、にょい、友人が言う。「僕じゃないぞ」。「いや、そのにょいとはちがいますね」。配水場を後にする。

まるで薄ら笑いを浮かべている表情に見え、ヘビが苦手な私は、全身に鳥肌が立つ。隣で友人は「マムシですかね。コブラだったらマングースと戦わせてみたいなあ」と人の気も知らないで、笑っていた。

観音寺へと続く細い道から出てくるおばあさん二人に出会う。県道を歩いている事情を話す。「この道も、今みたいにくささんの車が通らなくて、広い道に感じたねえ。車という便利なものがあるけど、昔の方が堂々と道の真ん中を歩けたから良かったかなあ」と目を細めながら私たちに話してくれた。角前田の交差点まで一緒に歩いた。



ハケ谷配水場から見た眺め

シリーズ

阿久比を歩く ⑤⑤



知多市と阿久比町の境界

梅雨入りした最初の日曜日。雨は一休みといった感じで天気は晴れ。草木地区で花かつみ園が一般開放（六月三日〜十七日）されている。今回は花かつみ園見学を兼ねて、県道草木金沢線（県道259号線）にぶらり旅へ出掛けた。

知多市との境界を出発点として、東に向かう。稲は株が太くなり色も濃い緑に成長している。道沿いのビワの木には実がたわわに実り、枝が垂れ下がっている。少し行くと、自

阿久比の道を行く（県道草木金沢線）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

動車部品などを製造している会社の工場が右手前方に見えてきた。工場のすぐ前が花かつみ園。道沿いから園の様子をうかがうことができる。多くの人が花かつみを観賞している。初夏の訪れとともに、ノハナシヨウブ（アヤメ科の多年草）の花が咲く。小ぶりの花で鮮やかな紫色の輝きは人の目を引く。草木地区では、昔からこの花を「花かつみ」と呼ぶ。室町時代に伯耆の国（鳥取県西部）から下芳池に移植されたと伝えられ、一時絶滅の危機にあったが、現在は「花かつみ保存会」が大事に守っている。

友人と二人で花見と決め込む。春は梅の花、初夏は花かつみ、秋は菊と阿久比では相場が決まっていますよね」と友人が話し掛けてきたので、クイズ番組の司会者の真似をして「そのとおり」と答えを返す。

アメリカ出身の人たちが花かつみ園を訪れていた。常滑市に在住しているという中年の女性が「日本のアヤメが大好き。去年初めてここに来



花かつみを観賞する来園者

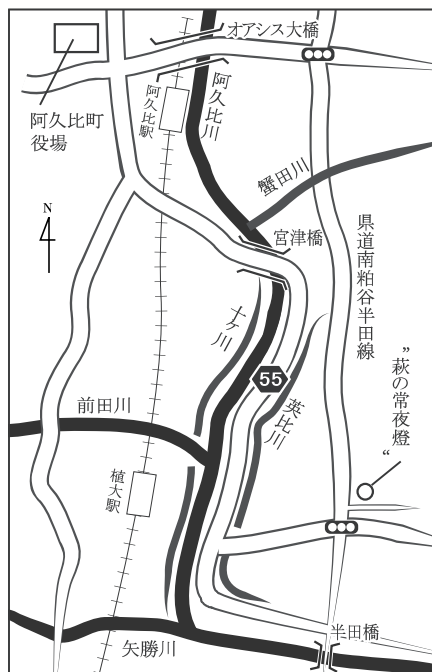
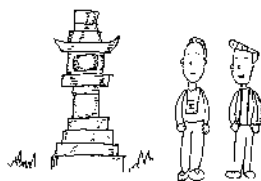
て、素晴らしい花に出会えたので今年も友人を誘ってきました」と流ちょうな日本語で話し掛けてきてくれる。

日本に来てまだ一年だという若い女性に「日本語大丈夫ですか」と前置きしてからオーバーアクションを交え、花かつみの感想を尋ねると「ハナノイロガトモ、ブライトネ、オー。花の色が明るいパープル。ブライト紫ね。（欧米か？）日本語と英語が混じり合う会話であつたが、彼女は鮮やかな紫色の花に感動している様子だった。

県道を東に進む。草木小学校を過ぎ西尾知多線との交差点で、信号待ちをしていると、車の中の夫婦から「名古屋から来たんだけど、花かつみ園はどこですか」と訪ねられる。「あちらです」と私たちが歩いて来た道を説明して、ぶらり旅を終えた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑤⑥



前方後円墳の二子塚古墳

半田橋付近から県道南粕谷半田線を北に向かう、ぶらり旅に出掛けた。天候は曇り。湿度が高く蒸し暑い。少し歩くだけでじつとりと体中が汗ばんでくる。昨晚見た悪夢（思い出せないが、うなっていたらしく妻に鼻をつままれ目を覚ます）で寝汗をかき、首の周りにできたあせもがヒリヒリする。

日曜日で休診の病院の駐車場で、スズメ同士が地面に降りてけんかを

する珍しい光景を目にする。口ばし

阿久比の道を行く（県道南粕谷半田線）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

を突っつき合う、激しいけんかだ。

友人が「恋敵同士のけんかですかね。それとも夫婦げんかですかね」と話し掛けてくるので「夫婦げんかならあそこまでしないだろう。多分、恋敵の戦いだな」と言葉を返す。ところで、家庭で夫婦げんかはしませんが」とプライベートなことを聞いてくる。「僕は妻の言うことは、右から聞いて、左に受け流すようにしているから大丈夫」と夫婦円満の秘けつを話している途中でスズメたちは、お互い違う方向に飛び立って行く。

ガソリンスタンドの奥に、常夜燈が見えたので、県道から少し東へ足を運ぶ。神社ではよく見かけるが、道に立つものは珍しい。通称「萩の常夜燈」と呼ばれる。

常夜燈横に看板があり、いわれの説明がある。建造は大正五年。伊勢皇太神宮への献燈として、伊勢の国を望むように西向きに造られ「伊勢大神宮」と文字が刻まれる。昭和十五年まで村で当番を決め、それぞれの家が毎晩交代で火をともし、一晚

中暗い道を照らしていたようだ。二人で後ろを振り返る。この先に伊勢神宮があるのか。よし。手を合わせるか。何を願ったのか聞かなかったが、友人は白い歯を見せて笑っていた。

北へ向かう。宮津地区に入る。蟹田川付近で足を休める。西の方角には田園風景が広がる。東の方角には川を挟み、南側は昔ながらの板壁の民家が並び、北側は区画整理が進み、新しい町並みが生まれつつある。

前方後円墳の二子塚古墳を横切り、オアシス大橋東交差点まで来て、今日のぶらり旅を終える。

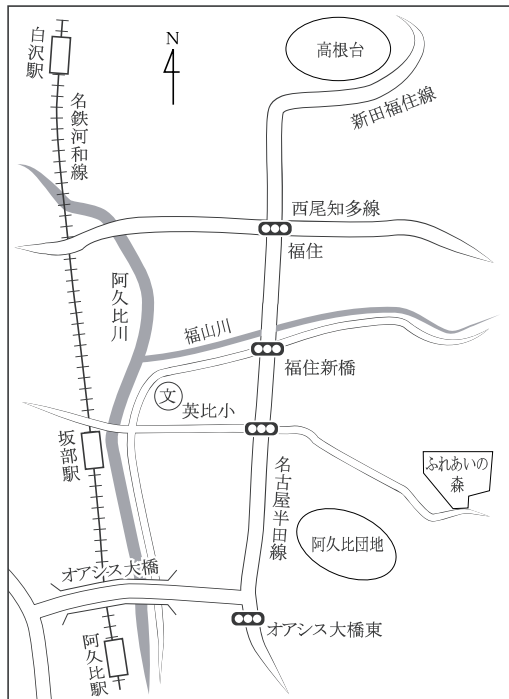
首筋が汗でヒリヒリするので、昨晚の思い出せない悪夢のことを友人に話す。夫婦円満と言っていたが、本当は奥さんとけんかして、ひっつかれたあとじゃないんですか」と言われ、「違うよ。これは、あせもだろ」とむきになって首筋を見せた。



「萩の常夜燈」

シリーズ

阿久比を歩く ⑤



福山川と英比小体育館

今回は県道と町道が続く名古屋半田線と新田福住線にぶらり旅に出掛けた。
オアシス大橋東の交差点から北へ向かう。東側には阿久比団地が続ぎ、西側を眺めると田園、阿久比川そして卯之山地区の民家が軒を並べるのが見える。
雨の後で道路が完全に乾いていない。友人が水たまりを見つけて、「子どものころ水たまりがあると、無性

阿久比の道を行く

(名古屋半田線・新田福住線)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

に入って飛び跳ねたくなりませんでしたか」と話し掛けてくる。「やったよね。梅雨時に、靴の中をぬらすとなかなか乾かないから親によくしかられたな」と私が少年時代を思い出していた矢先「ピシャ」。泥水が飛び散る。君もまだまだ大人になりきれない。家に帰ったらお風呂さんにしかられるぞ。友人は頭の後ろをポリポリとかいていた。
左手前方に英比小学校が見えてきた。耐震化のために新しく建て替えられた体育館は、スポットライトが当たっているかのようにまぶしく輝いている。アーチ型の屋根の曲線も美しい。
歩を進め、昨年の一月に開通した福住新橋を渡る。橋の下には福山川が流れ、水は東の方から阿久比川へと流れていく。
西尾知多線にぶつかる。信号が赤から青に変わるのを待って、横断歩道を渡る。さらに北へ向かう。だんだん道路の勾配がきつくなる。自転車に乗る子どもたちがサドルから立

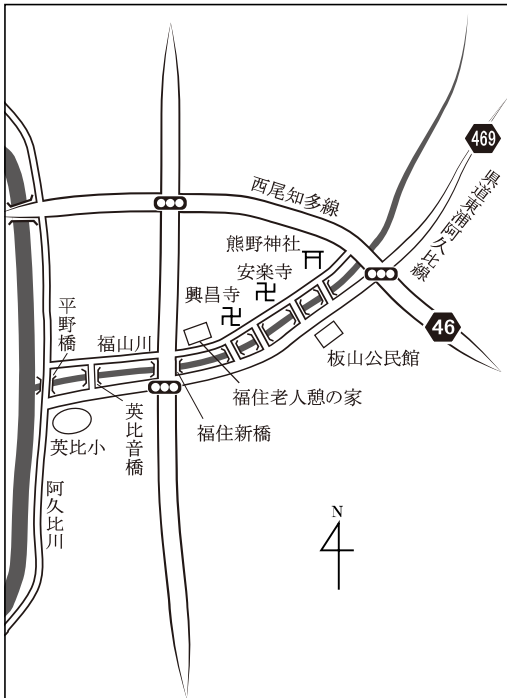


昨年開通した福住新橋

ち上がり、おしりを大きく左右に揺らしながら必死にペダルをこいでいる。マラソンコースならば「心臓破りの丘」とでも言うような坂道が続く。昨日の飲み会の疲れもあり、私たちの体力も極限状態。マラソンランナーならこんなとき何を考えているのかな。「栄光のゴールの瞬間じゃないですか」「かつこいい。君は今、何考えてる」「ぬれた靴が明日までに乾くか心配しています。友人は先を見つめずに、足元ばかり気にしていた。
坂を上り切り、大きくカーブするようにして新田福住線を歩く。高根台地区の閑静な住宅街が並ぶ。庭先に施された花や観葉植物のガーデニングが目を楽しませてくれる。
東浦町と境付近の街路樹からセミの鳴き声が聞こえる。小学生二人が街路樹の下からのぞきこむ。セミの声がなくなると、子どもたちはすぐそばの水たまりで無邪気に水の飛ばしっこを始めた。先ほど、どこかで見た光景を思い出す。友人は足元を見つめていた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑤8



熊野神社参道

県道東浦阿久比線（469号線）から福山川沿いの町道へぶらり旅に出掛けた。
梅雨も明け、太陽の日差しがまぶしい。夏を待ちかねたようにセミの声が「シャカ、シャカ」鳴り響く。東浦町との境から今日も張り切ってスタートを切る。
空にはもくもくと入道雲。暑さのせいか雲がソフトクリームに見えてくる。暑い中、いい年した男二人が

阿久比の道を行く（県道東浦阿久比線ほか）

あぐいぶらり旅

歩いているので、通り過ぎていく車の運転手たちは、物珍しそうにこちらを眺めていく。
西尾知多線を横切り、町道に入る。福山川沿いを歩く。脱水症状を起こすといけないので、熊野神社で水分補給をすることにした。石橋を渡るとクスノキが参道に生い茂り、木陰をつくる。一歩足を踏み入ると、ひんやりと涼しい。汗が「さー」と引く。神社境内に入ると、再び太陽が照りつけ、めまいさえ感じる暑さが私たちを襲う。ジュースを飲んでのどを潤し、しばらく休息を取る。今日は友人がとぼけたことを言わない。ぐったりと黙っている。
二人とも黙ったまま目を合わせ、うなずいた後、先を急いだ。西へ向かう。知多四国八十八カ所の札所である安楽寺と興昌寺を通り過ぎる。福山川の堤にヒマワリの花が咲く。夏といえばヒマワリ。私たちと比べものにならないほど元気がいい。
福住新橋を渡り、英比小学校がある方へと進む。友人が「この先にメ

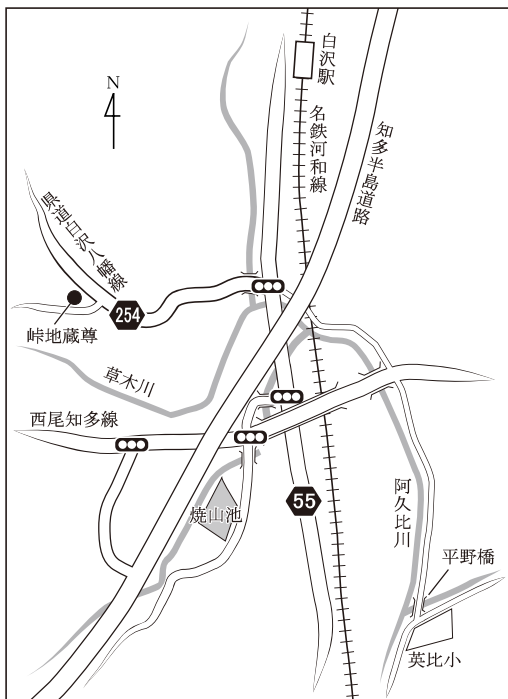
ロデイ橋がありますよ」と言う。「へえ。それなあに」と尋ねる。「橋の欄干に鉄琴が埋め込んであって、たとくともロデイになるんですよ。」「おもしろそうだね。行ってみようか」。
友人の記憶は確かだった。英比音橋^ぼが存在した。橋の欄干に童謡「赤とんぼ」「お馬」の楽譜のプレートと音符がデザインされた鉄琴が作られていた。
「これこれ。小学生のとき、ここにあつた」ぼち「よく音を鳴らしましたよ。懐かしいなあ」。友人は指のつめ先で鉄琴をたたきながら「♪夕焼小焼の赤とんぼ 負われて見たのは いつの日か♪」と口ずさんでいる。作曲した山田耕筈さんもびつくりするに違いない、見事に音程の外れた音痴な歌声であった。
その後、メロデイが頭から離れず、童謡を二人で熱唱しながら平野橋まで歩いた。♪ぽっくり ぽっくり歩く♪。



メロディを奏でる 英比音橋

シリーズ

阿久比を歩く ⑤



峠の 抱き 地蔵”

前回歩いた平野橋から阿久比川沿いを北に向かい、県道白沢八幡線254号線（をぶらり旅した。日本各地で観測史上最高気温を記録するなど猛暑が続く。「暑いなあ」「この暑さなんかならないですね」。友人との会話は暑さの話題にしかならない。とにかく暑い。阿久比川には大きなコイたちが気持ちよさそうに泳ぐ。水の中で涼しい顔をするコイがうらやましく思える。

阿久比の道を行く（県道白沢八幡線ほか）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

知多半島道路の下をくぐり、県道55号線を横断して県道254号線に入り、西へ向かう。田んぼでは、実り始めた稲穂のガードマン「かし」の姿が目につく。自分たちを励ます気持ちも込めて「暑い中、ごろうさま」と声を掛ける。

宝安寺に立ち寄り休憩を取る。「暑い」「・・・」。水分補給は十分過ぎるほど取り、腹の中は「チャポチャポ」。境内でセミの声が一匹もしないのがせめてもの救い。流れ落ちる汗をタオルでふく。

再び県道に戻る。民家が立ち並ぶ間を道が続く。緩やかな坂道を上っていく。沿道の柿の木には、緑色した実が付く。「稲穂」しかり、「柿の実」しかり、自然界では暑さの中でも、秋の準備が着実に進んでいる。実りの秋が待ち遠しい。

分かれ道の一角にのぼりが立ち、小さな堂の中に地蔵がまつられている。地蔵のことが気になり、近くの民家で尋ねる。地蔵のある場所は昔の峠で、道しるべの役割を果たす。



稲穂のガードマン「かし」

「右佐布里」「左草木」と刻まれている。地蔵を抱いて祈ると、願い事がかなうと伝えられ、今でも地蔵を抱く人の姿を見かけるとのこと。八月と一月の年二回「地蔵まつり」が行われ、近くに住む六件の家が順番で世話をし、まつりの日にはお年寄りや子どもが念仏を唱える。「お参りが終わった後に団子やお菓子が配られるから、子どもたちは毎回来しみにしていますよ」と話を聞かせてくれた女性が目を細める。

「君もお地蔵さんを抱いて願い事をしてみたら」と友人に勧める。恐る恐る地蔵を抱き、目を閉じて何やら祈っている。「何をお願いしたの?」「もちろんあのことです。想像にお任せします」。想像は付くのでそれ以上のことは聞かなかった。

知多市の看板が出てきたので今日のぶらり旅を終えることにした。私たちの周りを赤トンボが飛び交う。暑い中、少し秋が見えた。

今回で「阿久比の道を行く」を終了し、次回から「ふれあいマップを歩く」を連載します。